

2016年5月29日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 19 章 31～40 節

説教：信者バルジライ

はじめに

ダビデの息子アブシャロムは父に逆らい、父を殺そうと戦争をしかけようとします。このことを知ったダビデは、大急ぎでエルサレムを脱出し、マハナイムと呼ばれる荒野に逃げ延びていきます。でも、大切なものはすべて都に置いてきてしまいました。今で言う難民になってしまいます。

そんな困っていたダビデのところへ駆けつけたのが、きょうのところに登場するバルジライという人です。彼は、たくさんの食料と生活道具を携えて来ました。その後、アブシャロムとの戦争となったときも、必要な道具は彼が提供したのだらうと思われます。そんなことができたのは、彼が非常に富んでいたからであったと 32 節にあります。

戦いは終わり、ダビデはいまエルサレムに戻ろうとしています。そのとき、バルジライとダビデがどのようなことを語ったのか、そこから神さまの恵みを見ていきたいと思ひます。

1 ダビデの申し出

1) バルジライの恩に報いるために

まずダビデがバルジライに語ったことば、33 節です。「私といっしょに渡って行ってください。エルサレムで私のもとであなたを養いたいのです。」

自分が大変困っていたときに、私財を投げ打って支えてくれたバルジライの恩になんとか報いたいと考えています。いや、ただお金を出したということではありません。ダビ

デの側につけば、アブシャロムを敵に回すことになります。もしもアブシャロムが勝てば、バルジライは厳しく処罰されることになる。そのことを覚悟の上で、ダビデを経済的に支えた。バルジライはいのちをかけてダビデを支えていたのです。ダビデはそれがよくわかっています。だからこのような申し出をします。

2) 「私といっしょに渡って行ってください」

「私といっしょに渡って行ってください」とあるのは、ヨルダン川のことです。かつてイスラエルの民は、ヨルダン川を渡って神の約束の地に一步を踏み出したことが、ヨシュア記に書かれています。ダビデはバルジライを神の約束の地にともない、王のそばで生活できるようにとりはかろうとしました。王さまから直々にこんなことを言われれば、一般庶民にはこれ以上ない光榮です。これに対してバルジライがどのように答えたのかを次に見ます。

2 バルジライの応答

バルジライは八十歳で、からだも衰えてきていることを自覚しています。それで自分がエルサレムに行ったとしても王さまの重荷になるばかりなので、行くことができないと言って断ります。でもただ断るのではなく、バルジライは二つのことを王に願っています。

1) ヨルダン川を渡って、ほんの少しだけま

いりましょう

一つ目は36節にあります。「このしもべは、王とともにヨルダン川を渡って、ほんの少しだけまいりましょう。それ以上、王はどうして、そのような報酬を、この私にしてくださいらなければならないのでしょうか。」

もう八十歳なので無理をしないで、自分はヨルダン川の東側にとどまり、王さまが川を渡っていくのを見送る、という選択もできたはずで、ところがバルジライは、川を渡って行き、ほんの少しだけでもとにかく王さまといっしょに進んで行くのだと言います。

どうしてでしょう。ダビデが熱心にいっしょにエルサレムに行きましようかと誘ったので、『ノー』と言って断るのがさすがに気が引けた。少しだけでもいっしょに行って、ダビデの機嫌を損ねないようにした、と言うことでしょうか。

ダビデもバルジライも信仰者です。お世辞だとか、腹の探り合いのようなことをする必要はありません。二人はまるで神が目の前におられるかのようにして会話をしています。ということは、バルジライは、ダビデの機嫌を取るためにいっしょにヨルダン川を渡ろうとしたのではなく、何か深い理由があつて言ったのではないか。そのことはまた後で触れることにします。

「王とともにヨルダン川を渡り、ほんの少し行ってから戻りましょう。」それが一つ目の提案でした。

2) キムハムが王さまといっしょに渡ってまいります

(第一列王記2章7節)

二つ目の提案は、37節の後半にあります。

「しかしここにあなたのしもべキムハムがおります。彼が、王さまといっしょに渡ってまいります。どうか彼に、あなたの良いと思われることをなさってください。」

第一列王記2章7節を見ると、キムハムはバルジライの子どもであつたらしいことがわかります。もちろんキムハム一人だけのことではなく、彼の家族や使用人もいっしょです。バルジライは自分はエルサレムに行くことはできないけれど、自分の息子とその家族を連れて行って欲しいと言うのです。

どうしてこのような提案をしたのでしょうか。バルジライが大きな会社を経営していて、この機会にダビデと親戚関係になっておけば商売をする上で大きなメリットがあるから、と言うことでしょうか。もちろん、そんな打算があるはずはありません。

では、こういうことでしょうか。イスラエルの王であるダビデからの折角の申し出を、どんな理由であれ断るのは大変な失礼になる。それで代わりに息子を行かせようとしたのか。日本では、「義理を立てる」ということばがあります。バルジライもダビデに義理立てをした。でももしそうだというのならわざわざ聖書に書く必要はありません。

3 王といっしょにヨルダン川を渡る

1) くり返されることば (33, 36, 37, 38節)

今日の箇所、くり返されている表現に注目してみたいと思います。いつも言いますが、大切なことばはくり返されて用いられる。それが聖書の特徴です。

そのことばは何か。四箇所挙げます。33節。「私といっしょに渡って行ってください。」36節。「このしもべは、王とともにヨ

ルダン川を渡って、ほんの少しだけまいりましょう。」37 節。「彼が、王さまとっしょに渡ってまいります。」そして38 節。「キムハムは私とっしょに渡って来て良いのです。」

おわかりでしょうか。くり返されているのは、「王とっしょにヨルダン川を渡る」ということばです。偶然ですか。いいえ、そうではない。ただ川を渡るのではなくて、王とっしょに渡ることこだわっています。だから何度も同じことばをくり返しているとしか考えられません。なぜこだわるのか。

2) 水に入って川を渡る

最初に触れたように、ヨシュアはイスラエルの民を率いてヨルダン川を渡り、神の約束の地に入りました。私たちが生きてきた罪の世界と、神による救いの地、神の御国、その境目に流れている川、それがヨルダン川。そのように見ることができます。

ヨシュアがヨルダン川を渡ったとき、上流で水がせきとめられるという奇蹟が起き、人々は乾いたところを通って渡ることができました。しかし、今ダビデと彼に付き従う者たちが川を渡るとき、そのような奇蹟は起こりません。橋もなければ船もありません。向こう岸に渡るには、水に入らずに濡れになしかりません。否がでも応でも、エルサレムに戻るためにはそうするしかありませんでした。

3) ヨルダン川でキリストがしてくださったこと

言い換えれば、救われるためには川を渡らなければならないということになります。一人でがんばって渡れと言っているのではあ

りません。今日の箇所では何がくり返されていると言いましたか。「王とっしょにヨルダン川を渡る。」このことばでした。イスラエルの王がヨルダン川をずぶ濡れになって、人々とっしょに渡ります。それは何を示しているのでしょうか。

ダビデの姿はイエス・キリストを指し示します。イエスが宣教活動を始めるに当たり、最初に何をしましたか。ヨルダン川に入られて洗礼を受けられたのですが、洗礼を受けたヨハネもこれには驚きました。洗礼を受ける必要のない方なのに、そうされました。主は、私たちが救うためには罪人とっしょに川を渡らなければならない、そう考えたからです。「わたしはあなたとっしょにこの川を渡る。」神とはそのような方である。バルジライは信仰によってそのことを知っています。だからこだわります。「このしもべは、王とともにヨルダン川を渡って、ほんの少しだけまいりましょう。」

4) キムハムとその家族に恵みが及ぶ

さて最後にキムハムのことを考えます。考えてみると不思議です。ダビデに対して親切を施したのはバルジライです。神の恵みを受ける資格があるのはバルジライ。ところがキムハムが恵みを受けています。キムハムは何かよいことをしましたか。したのは父親です。自分は何もしていない。それなのに、ダビデから恵みを受ける資格があるとみなされました。バルジライの信仰によってキムハムも救われました。もっと言えば、バルジライが途中までしか行くことができなかったから、それで家族に恵みが及んだ、と言うことはできないでしょうか。

もしそうなら、これは私たちにとって大き

な励ましです。私たちの信仰が家族を救う可能性があるとということです。私たちは途中までしか行けないかもしれない。でもそのことがかえって私たちの家族を救う可能性があると言っているのです。驚きです。途中で手放すことは悲しいことかもしれません。でもそこから神の恵みが広がっていくのです。

神は小さな私たちを通して、想像をはるかに超えたところにまで恵みを施そうとしておられる。そのことを覚えたいと願います。